



Title	セバスティアン・カステリヨン『疑うすべについて』（第2巻；抄訳）
Author(s)	小山, 誠南
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 138, 275-291
Issue Date	2021-06-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.138.275
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82167
Type	departmental bulletin paper
File Information	18-1882-1669-138.pdf



セバスティアン・カステリヨン『疑うすべについて』 (第2巻；抄訳)

小 山 誠 南*

・目次

【訳者まえがき】

【翻訳】

【付録】

・キーワード

セバスティアン・カステリヨン (Sébastien Castellion, 1515-1563), 三位一体,
信仰

【訳者まえがき】

本稿はSébastien Castellion, *De l'art de douter et de croire, d'ignorer et de savoir* (traduit du latin par Charles Baudouin, éd. Jeheber, Genève-Paris, 1953) の改訂版 (réédition Carrière-sous-Poissy, Éditions La Cause, 1996) の125頁から144頁を翻訳したものである。なお翻訳にあたっては, E. F. ヒルシュによる本書のラテン語原文の校訂版, Castellio, S., *De arte dubitandi et confidendi, ignorandi et sciendi* (Leiden, E. J. Brill, 1981) も参照し, 鍵となる語彙についてはラテン語を付記した。

今回訳出したのは第2巻の冒頭, 第1章から第6章である。ここではカステリヨンの持つ三位一体論と信仰論が展開されており, 彼の思想を知る上で非常に興味深い議論がなされている。なお【翻訳】における注記は全て原注に従っている。

【翻訳】

第1章

前巻では, 概して, 感覚 (sensu) と理性 (ratione) に係る問題について, その判断は感覚と理性の下にあることを示した。次に明らかにしたいのは, 個別の問題についてである。というのも, 我々としては聖書が感覚と理性に関するものであると考えたいのだが, 多くの人々はいくつかの問題における感覚と理性の有用さを認めないので, 全員の見解が一致しているわけではないからである。ここでは, 我々の採る手段は以下になるだろう。まず初めに, 各人の理性に従い, 議論的になっている問題を扱う。次いで, 理性に聖書から裏付けをする。そして, 我々の主張に対して唱えられている, あるいは唱えられ得る異議について詳述する。

* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程
DOI : 10.14943/b.edu.138.275

ただその全てを述べることはしない（人間は全てを覚え、その全てに思いを巡らせることはできず、せいぜい何が有益であるかを考えることしかできないからである）。しかしその反論によって、他者との議論が円滑になりそうな主要事項については、扱うつもりである。このことを読者の方が心に留め置かれるよう私は望む。気難しい性格で、聖書の言葉に固執する者は、他の者からどんなに間違っていると思われても、自らの説を撤回しようとはしない。私が筆を執るのはそうした者たちのためにはない。私はもっと分別があるが、異なる見解を持つ者に訴えるのである。言葉が事象に忠実であるのではなく、事象が言葉に忠実であるということを読者が理解し、これを受け容れられるよう私は期待する¹。他方、我々は全ての問題を扱うことはしないが、特に議論を要すると思われ、キリスト者たちもその用意をせねばならないほど今日でも激しい議論を巻き起こすものについて、私は互いに傷つけたり思い悩んだりせよというわけでもなければ、ゲヘナ（gehennae）の永遠の苦しみの中へともに身を投じよというのではない。我々は、これら全ての問題の考察はしないのである。というのも、こうした問題には古くからの誤謬が含まれていて、当時にも反駁されていたのにも拘わらず、今日でも多くの議論が交わされているからである。だからもし、ある者がその点についてなされている議論を知っていながら、その誤謬を擁護するのであれば、私はその者を頑迷であると見なすし、彼を相手に議論をすることもない。なにしろ彼は、私が前巻で述べた、見識のない者たち（non posse collustrari）のうちの一人ということになるのだから。それは、彼らが目を閉じていることに由来する。以後、既に記したように、問題を二つに分ける。一つは全編を通じて、あるいは部分的に、感覚と理性の有用さについて述べるものである。もう一つは、感覚と理性の有用さでは判断できない事柄についてである。

第2章 三位一体について

前巻と同じく、ここで再び神それ自体を根拠とするべく、まず初めに三位一体の問題について考えよう。

理性は神の力の存在を悟る（Esse deum ratione percipitur）。これについては前巻の冒頭で示した。そして全ての民族は理性によって、これを確信するに至った（そうでなければ非常に野蛮で、森で獣同然に生きていたことになる）。神は唯一か、もしくは複数かということに関して、理性は悟ることがないか、そうだとしても非常に難しい。だから理性を賦与されているにも拘わらず、啓示を受けていないが故に、実に多くの民族が多神教を崇拝したのであった。しかし世界の光たるキリストの到来によって、（かつて世界を構成する3地域とされていた）アジア、ヨーロッパそしてアフリカで唯一神が信仰されるようになった。その後、実に多くの誤謬（errores）がもたらされ、数多の罪（scelera）にまみれながらも、かの地域での信仰は今日まで絶えることがなかった。つまり光の力が大きければ、闇の中でも輝くということである。唯一神が存在するというこの真理は、信仰を通じて受け容れられたのだから、何人たりとも否定し得ない。この真理に基づき、三位一体が存在するのか、それはいか

¹ 聖書の言葉が事実に反する形で認められることを望むはずがないと、著者は主張している。

従って、その反対意見は次のように解されるはずである。すなわち言葉は事象に忠実であり、これをよく反映していて、事象を表すべくこれに従属しているはずである。事象（事実）は言葉（表象）に忠実ではなく、事象の実現性と実態を示すために、言葉を支配し隷属させている、という主張である。

なるものか探求することが理性には可能である。これは難しい問題であり、確固たる見解を述べることは危険ですらある。私も何かを断言することのないよう用心したい。そこで私はまだ公刊していない、対話形式の小規模な討論を、読者の考えに委ねたい。その意義を判断してもらいたいのである。私としては、これは検討に値するものだと思っている。著者の想定として、自身とアタナシウス (Athanasius) という人物の議論が次の言葉から始まる。

アタナシウス

「救済 (salvus) を望む者は何よりもまず、カトリック信仰を表明する必要がある。これを全面的かつ不変的に持ち続けぬ者は皆、間違いなく永久に墮落するだろう (in aeternum peribit)」

匿名の著者

「ではカトリック信仰とは、万人が表明できるようなものでなければなりませんね。徴税吏も売春婦も、十字架に架けられた折にイエス＝キリストを信じ、そして救済された犯罪者でさえも、カトリック信仰を表明していたということですね。そうでなければ彼らは墮落していたはずですから」

アタナシウス

「カトリック信仰とは唯一の神を三位一体において崇めることであり、三位一体を唯一性において崇めることである」

著者

「その類の信仰が徴税吏にも売春婦にも共通するものだったとは私には思えません。もしあなたがそうお考えなのであれば、証明してみせてください。私には聖書のどこにも、そうした痕跡が見つけられないのです。あなたの記したことが本当なら、徴税吏や売春婦は間違いなく永久に墮落していたといえます。あなたが過去についてではなく、未来について話すのであればですが。しかしアタナシウス、時宜を得て話す時代を変え、あなたに先んじて信じる必要のないものが、あなたの後で信じなくてはならなくなるというのは、肝要ではありませんね。

まず初めに問題となる、唯一性と三位一体について尋ねます。三位一体とは3という数のことです。例えば人が本の頁の「三位一体 (trinitas)」について話題にするととき (印刷工はラテン語で "ternio", ギリシア語で "triades" と言います), 3枚の紙を意味することがわかります。また——同じ意味で——"decadem" と話題になれば、10枚の紙のことだと解するはずです。さて、あなたは何の唯一性や三位一体について話しているのでしょうか。もしそれが神であるなら、あなたはこんな風に言うはずです。「我々は神々の三位一体、即ち三神において唯一神を崇め、唯一神において3柱の神を崇めねばならない」と。私の言ったことを、あなたはお認めにならないでしょう。もし位格 (persona) であれば、こう仰るはずです。「我々は三つの位格において唯一の位格を崇め、唯一の位格において三つの位格を崇めねばならない」と。やはりこれも、あなたはお認めになりませんね。なにしろ以下に示す通り、三つの位格が唯一の位格を形作ることはないと、あなたは唱えておられるのですから。もしあなたが話そう

と考えているのが実体（substantiae）の唯一性や三位一体であるなら、それは次のように解されるはずだ。「我々は三つの実体において神の実体を崇め、唯一の実体において三つの実体を崇めねばならない」と。しかしあなたのお考えが本当にそうしたものであるなら、そこには三つの実体が、つまり3柱の神がおわすことになります。もしそうではなく、我々は三つの位格において唯一の神聖な実体を崇め、唯一の実体において三つの位格を崇めねばならない」と解せねばならないなら、あなたは全く不明瞭（obscure）で実に謎めいた（aenigmatice）方法でご自身のお考えを述べていることになります。この方法は、万人によって守られるはずの信仰の象徴をお作りになった主にほとんど矛盾しています。万人が知らねばならない事柄とは、せめて万人が理解できるような方法で唱えられねばなりません」

アタナシウス

「位格の混同も、実体の分割もしてはならない」

著者

「あなたが位格と呼んでいるものについてよく理解しておきたいですね。もしも古代ローマ人が、カエサルの人格（persona）はカエサルのためのものだと言ったときと同じような意味で位格を理解なさっているのだとしたら、位格は実体と同じものとなるでしょうし、あなたの話していることは無意味になりますね。逆に位格を通じ、市民であり、仕立て屋であり、父親でもある一人の男には三つの人格があると我々が考えるようなことを意味しているのでしたら、父なる神と子なるイエスおよび聖霊は唯一かつ同一のものであることを、あなたは我々に示しておられます。ということは、キリストが父、子そして聖霊の名の下に洗礼を命じるとき、三つの名を持つ唯一神にかけて洗礼を命じているかのようです。これは間違ったことですし、そうした教えがアブラハムの子、イサクの子そしてヤコブの父の名においてなされ、キリストが父に祈った折、ご自身にも祈りを捧げていて、また父が子を生んだ折にはご自身もお生まれになっていた上に、父が子と聖霊を遣わした際、ご自身をも遣わされていたというのは筋が通っていません。これが間違っていて非常識（inepta）だということを否定する者はいないでしょう」

アタナシウス

「確かに父と子と聖霊の位格は異なるものである。しかし父と子と聖霊は唯一の神性であり、威光であり、永遠の主である。それが父であり、子であり、聖霊である。父も子も聖霊も、創造され得ぬものである。父は無限であり、子も聖霊もそうである。父と子と聖霊は永遠である」

著者

「私にはその痕跡が聖書の中に見つけれられません。そうした事柄を信じなさいとは全く命じられていない神以上のことを、あなたは私たちに要求しているのですね」

アタナシウス

「永遠なるものは三つではなく、一つである。同様に、三つの創造され得ぬものや無限なるものがあるのではなく、一つの創造され得ぬもの、そして無限なるものが存在するのである。

父は全能であり、子も聖霊もそうであるが、三つの全能なるものがあるのではなく、一つの全能なるものがある。父は神であり、子は神であり、聖霊は神であるが、神が3柱いるのではなく、いるのは唯一の神である。父、子、聖霊は主であるが、やはり主が3人いるのではなく、主はただ一人である」

著者

「ではあなたはこう仰るのですね。アブラハムは老人であり、イサクもヤコブも老人であるが、彼らは3人の老人なのではなく、ただ一人の老人なのだと。あるいはこう仰るのでしょうか。ヤシの老木、ヒマラヤスギの老木、カシワの老木があっても、それは3本の老木ではなく、ただ1本の老木だと。そうした事柄を信じるには、アタナシウスよ、私は理性をすっかり捨て去ってしまわねばなりません(理性はあらゆる神の賜物の中で最も素晴らしく、理性によって人間は獣よりはるかに優れています)。だから私と獣の間で、その本性(naturam)と判断(sensum)を取り替えて、私からそれらを取り去ることが、信じるためには必要です。その昔、ゴルギアスというソフィストがいて大胆にも、存在するもののうち、存在するものは何もない(nihil esse eorum, quae sunt)と主張しました。当然、イソクラテスはその不条理(insaniam)に反論しました。しかし、いずれも永遠であるという三つのものが三つの永遠なるものではないのだと言い切るならば、あなたが唱えておられることは不条理であるように見受けられます。私には神も、自然も、全ての民族の言語も、文法も、弁証法も、算術も、3は3、1は1であり、三つあるのなら一つあるということではないし、一つあるのなら三つあるということではないと教える点で一致しています。これを否定する者は獣と大差なく、何かを学ぶこともないように私には思えます」

こうして著者は、私が読者の考えに委ねたいと望んだことについて述べた。もちろんアタナシウスを擁護できるなら、私はそうする。しかしそうはできないと、私は述べておかなくてはならない。もし誰かがそうできるなら、私は賛同するつもりである。真理(veritatem)をかき消す考えなど私は御免だが。私の信仰についていえば、唯一の神、全能な父、天と地の創造主を信じているし、その唯一の子たるイエス＝キリスト、我々の救い主を信じているし、聖霊を信じている。私が生きていて、そして神の力添えによって最後まで生きようとするのは、信仰においてである。使徒たちを通じ、我々に伝えられてきたこの質朴な信仰を守る者は、たとえ使徒たちの純朴な時代の後、あまりに熱心な者によって教会で教えられている、何だかわからない奇妙な信仰を告白することがなくとも、救済へ至る道にあると私は確信している。私や、私と同じような人が理解できないことを理解するための強烈な考えを誰かが持っていても、宜しい、私はそれをうらやましいとは思わない。しかしこういった考えの強烈さを、救われるはずの全人類に求めるというのは——少なくとも私の考えでは——大多数の人々にとって救済への道を閉ざすことになるだろう。

第3章 信仰について。信仰は意志より生じるのであって、知性から生じるのではない。

では信仰(fide)について語る。前に我々は、ある者たちの言説に反して信仰は知識(notitiam)ではないこと、そしてそもそも信仰とは何かを示した。これは理性による判断を通じ、容易に理解できる。理性を賦与された全ての存在は、信じる(credere)とはどういう

ことかを知っているからである。見る、聞く、考えるとは何かを知っているように。これは説明するより簡単に理解できる。一つ例を挙げよう。これにより信仰の本質を完全かつ明確に理解できるであろう。「ヨハネによる福音書」(IX)において、イエスが生まれつき目の見えない人の目に泥を塗り、シロアムの池へ行って洗うように命じたところ、目が見えるようになったと伝えられている。この者がイエスの命じたことに従い、池へ行ったという事実は、信じるということの証である。この者は見えるようになると信じたのである。仮にこの者が信じていなかったならば、池へ行かなかったはずだからである。目を洗うと見えるようになったという事実は知っている (scientis) ことの証左である。この者は信じることを知っていたのである。ここで彼の信仰は言葉を、知識の現出に見出したのである。なにしろ信仰とは、知識へ至る道 (via ad scientiam) なのだから。そして知識が見出されるとき、信仰はその役目を終えていたのである。イエスが闇の中を、つまり目が見えない状態の人間に行きなさいと命じたことに、私は大いなる神秘 (mysterio) があると思う。これによって信仰の力強さが示されており、その力強さは闇の中にある人、つまり自らが信じるものを知らぬ状態の人を導くのである。「信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った」(「ヘブル人への手紙」, XI, 8) とある。同じように、「ヘブル人への手紙」で言及される多くの証言者たちは、未だ見知らぬものを信じていた。さらにペテロは「第二の手紙」で、信仰は知識とは異なるものであり、知識は知ることから生まれるとして、「あなた方は信仰に徳を加え、徳に知識を加えなさい」(「ペテロの第二の手紙」, I, 5) と明示している。

信仰は意志 (voluntate) より生まれる。人間に刻まれている他の徳に劣らず、信仰は理性 (ratione) によっても、権威 (authoritate) によっても確認され得る。ユリウス・カエサルが言ったように「およそ人は自分の望みを勝手に信じてしまう (homines facile credere quae volunt)」(『ガリア戦記』第3巻, XVIII, 6) ということ、反対に、自分の望まぬものは容易に信じないということが理性によって伝えられる。確かに、何が自分の気に入るもので、何が入るものか我々は容易に理解している。その例は、枚挙に暇がない。もし自分の妻や子どもや友人にまつわる何か良いことや嬉しいことを聞いたら、たとえそれがもっともらしくなくても、我々はすぐに信じてしまうものである。そして何か悪いことなら、たとえ事実であっても、我々はなかなか信じようとしない。当然、我々は妻、子ども、友人の悪いところではなく良いところを求めるからである。同じように、病気になった酒飲み、それは不摂生の結果であると言えばその者はなかなか認めないであろうが、病気の原因が悪い空気など他の要因であると言えば、その者は喜んで認めるであろう。

しかし権威というのは我々にとって明白なものだ。何よりもまず人間は信じるという教えを、両親を愛すること、他者へ親切にすること、不義を犯さぬこと、盗みをはたらかぬこと、その他同様の事柄と同じように受け容れる。「悔い改めて福音を信ぜよ」(「マルコによる福音書」, I, 15) とイエスは言われた。また「なんでも祈り求めることは、すでになえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(「マルコによる福音書」, XI, 24) とある。信じる、あるいは信じないように誰かに命じるとき、我々はふつう、違う言い方をすることはほとんどない。その上聖書では、信仰が心の中 (in corde) にあることが示されている。「ルカによる福音書」には、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たち」(「ルカによる福音書」,

XXIV, 25) とある。また「使徒行伝」には、「まごころから信じるなら (si toto corde credis)」(「使徒行伝」, VIII, 37) とある。さらに「ローマ人への手紙」には、「人は心に信じて義とされ」(「ローマ人への手紙」, X, 10) とある。そして、「ヘブル人への手紙」には「不信仰な悪い心」(「ヘブル人への手紙」, III, 12) とある。これらから、義とされる人の言動の他の部分と同様に、信仰は心から、つまり意志から生じるということになるのである。

第4章 信仰が知性から生じると主張する者たちの論拠への反論

我々の主張に反対する者たちの言い分はこうである。信仰とは知性 (intellectus) のはたらきである、と。ところで知性のはたらきとは、専ら知識 (cognoscere) にある。故に信仰とは知識、起こり得る事象についての知識である。もっともこれらは真あるいは偽である (sive sunt verae sive falsae)。トルコ人が「信仰によって、私はムハンマドが神の預言者であることを知る」と言うとき、それは間違った事象についての信仰と知識である。これについて私はこう答える。間違った事柄について、人は知識を持つことができない。しかし誤謬と呼ばれる、魂にとっての目に対する幻覚のような、知識についての誤った見解を持つことはできる、と。目にはそれが何かわからぬように、魂にもそれが何かわからないのである。太陽を見た気になっている者は、幻覚を催しているのである。同じように、ムハンマドが神の預言者だと知っている気になっている者は、知っているのではなくて過ちを犯しているのである。

我々に反対する者はこう言うだろう。知性とは生来的な能力 (facultas naturalis) であり、だから示される物事の根拠 (evidentia) の程度に応じて、あらゆる必要性を認めたり認めなかったり、あるいは疑いを残したりするのだと。そこで根拠を欠いていれば認められず、信じられないことになる。私に言わせれば、根拠を欠いた起こり得ぬこと、つまり知っていなくてはならないのに言い表すことができない事象を、人間というのは実によく信じてしまうものである。老いたアブラハムは、やはり老いて不妊の妻に子どもができる(「創世記」, XVIII) という、根拠のない、あり得ないようなことを信じた。もちろん、そう約束した神が事実を述べているというのはあり得ることである。だが神が約束する事柄というのは、それ自体は信じがたいものである。しかしここでは、アブラハムが神を知っていたかではなく、彼が神との約束に基づいて信じた事象を知っていたかが問題であり、我々としてはこれを否定したい。ほかに例がある。「列王記」の第3巻(実際は「列王記上」, 20-35ff)にこんな話がある。ある預言者が主の言葉に従って、仲間に自らを打つよう命じたが、その人は打つのを拒んだ。しかし別の者はこれに従った。つまり一方は預言を信じ、他方はこれ信じなかったのである。なぜか。一方にはあり得ることで、他方にはあり得ぬことに思えたからなのか。そうではない。確かに、ほとんどあり得ない同じ事柄が同じ方法で命じられてはいる。もっとも、神の名の下に、無垢の人に打つてくれと言う預言者を見かけることほどあり得ない、信じられないことがあろうか。だから信じた者は知性によって、物事の蓋然性 (probabilitatem) を頼みとしたわけではないのである。その者は自らの意志によって、預言者の言ったことを信じたのである。我々が道半ばにあるとき、その道行を示してくれる人を信じてしまうことがある。いかなる蓋然性によってもそうするつもりがなく、また誰かに理性を取り戻してもらうこともないままに。左を向けずに、しかし知性ではなく意志と信仰のはたらきによって、見知らぬ者の指示で右を向いてしまうことがある。そして町についたそ

のとき、道を示してくれた人の言葉が——信じていたことが——真実であったと我々は知るのである。たとえそれ自体では事象 (res) があまりにあり得ないもののだとしても、神への臣従 (obediendum) において我々を助けるのに役立ち、異論の余地もないほど尊い別の例を挙げよう。カルデア人に包囲されたエルサレムが今にも陥落しそうになったとき、神は、ハナメルがエレミヤのところに来て (「エレミヤ書」, XXXII), あなたの国の近くにあるアナトテの畑を買い取ってくれと言うと予言した。事実、そのようになった。ハナメルは本当に来たし、聖句でも言われているように、彼がまさに主の使徒であることをエレミヤはただちに理解したのである。一体なぜエレミヤはそれ以前に理解しなかったのか。もちろんそれは、彼にとって未知であったからである。彼はただ信じていただけだった。そしてここから、いかにして知識が信仰に続いて起こるのかがはっきりとわかる。この一節の直後、同じ話から、別の例が見つかる。あらゆる蓋然性に反する神の言葉を信じて、エレミヤは畑を買ったのである。というのも町の占領は差し迫っており、エレミヤが畑を手に入れられるなど信じられなかったからである。しかし彼は、聖句が伝えるように、(そう命じた神を知っているからこそ) この未知の事象を信じていて、神にその理由を求め、そしてその理由を知った。かくして知識は信仰に続くのである。

こう言う人もいるだろう。エレミヤがそうであったならば、信仰は妨げられていたものであり、人間は神と同じくサタンを信じていることになるだろうと。私はこう答えたい、そのようなことでは全くないと。私は、自らの信ずる神を人間が顧みなかったのだというつもりはない。むしろ人間はその事象を顧みなかったのである。人間は神を知っていて、それが神の言葉であると理解していたが故に、その言葉を信じたのである。しかし神が話される事柄について、しばしば人間は知らないでいる。使徒たちはキリストを知っていて、さらにその父なる神も知っていた。そしてキリストの言葉を信じていた。しかしまさにその言葉を、しばしば彼らは解しなかったのである。そのことは「ルカによる福音書」から明らかとなる。彼はここで、キリストがどのようにして自らの顛末を予言していたかについて語っている。「人の子は異邦人に引きわたされ、あざけられ、はずかしめを受け、つばきをかけられ、また、むち打たれてから、ついに殺され、そして三日目によみがえるであろう。——ルカによれば——弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。この言葉が彼らに隠されていたので、イエスの言われた事が理解できなかった」(「ルカによる福音書」, XVIII, 32-34) という。確かに、使徒たちはキリストの言葉を信じていた。彼らはキリストの言葉を正確に知っていたのに、それを解しなかったのである。キリストがパリサイ人のパン種に用心するよう忠告したときも、事情は同じであった (「マタイによる福音書」, XVI, 6)。使徒たちはパン種が問題なのだと解し、そう信じたが、彼らは思い違いをしていたのである。同じように、キリストが将来の治世 (regnaturum) について語ったとき、ゼベダイの子らは人間的な方法でなされるのだろうと考えた。この問題において、私が前に挙げた分類を思い起こすことが重要である。人に信じられている者を知っていることと、人に信じられている事象を知っていることは違うということである。というのも、事象について信じるのに、必ずしも知る必要はないからであり、そしてときには、神がそう望まないことさえある。事実、神の真理が讃えられるのは、人間誰しもそうであるように、既知の事柄について信じる場合よりも、未知の事柄について信じる場合においてである (そしてそれは珍しいことである)。しかし我々が信じる神を、我々は知っていなくてはならない。なぜ

なら、自らの信仰を未知のものとするならば、我々は誤謬へと導かれ得るからである。これについて、パウロがテモテに伝えた言葉に、「わたしは自分の信じてきたかたを知っており、またそのかたは、わたしにゆだねられているもの（つまりわたし自身の命）を、かの日に至るまで守って下さることができると、確信しているからである」（「テモテへの第二の手紙」、I, 12）とある。

またこう言う人もあるだろう。もし我々の信仰が自由意志や欲求（*arbitrii voluntatisque*）から生じるのであれば、我々が望めばすぐに、信じることができるであろうと。だがこれは間違いである。ところが、この意見の後半は間違いでも、前半は正しい。食べる、飲む、歩く、夜更かしをする…、これらは人間の自由意志の産物であるが、行うことのできないときもある。同じことは、偶発的にはあるが、信仰にも起こり得る。しかしだからといって、信仰が人間の自由意志の産物ではないということにはならないのである。

第5章 信仰がある種の知識であることを望む者たちによって等しく引用される聖句への反論

我々に反駁する者たちも聖書を引き合いに出す。まずは「ヘブル人への手紙」である。ここでは信仰が望んでいる事柄の実質（*substantia*）であり、見えないものを確証（*argumentum*）するもの（「ヘブル人への手紙」、XI, 1）と定義されている。中には、「実質」（ギリシア語聖書では *hypostasis*）とは、靈魂が拠り所とし、そして頼みとする支えのようなものを意味するとして、この文を解釈する者もある。それはまるで、信仰とは、神によって約束された物事を間違いなく、そして確実に所有する類のものであると考えられているかのようである。「確証」（ギリシア語で *elenchus*）に関して言えば、それは実体のない事象に対するある種の判断、証明、あるいはアウグスティヌスが考えたような信条であるとされている。つまりそれは、目に見えぬものについての証拠（*evidentiam*）、我々には見えぬものの想像（*visionem*）、実体のないもの（*absentium*）の存在、隠されているもの（*occultatem*）の明示である。このようにして、彼の者たちは、信仰が知識であることを望むのである。しかし私としてはあくまで平和的に、前の聖句についての彼らの解釈が正しくないと言うつもりである。まず信仰とは、敬虔な者が拠り所とするものではない。なぜならこの場合、信仰は実体のない、信仰それ自体を根拠としているからである。信仰はそれ自体を根拠とするのではなくて、神あるいは神との約束（*promissis*）に基づく。信仰とは約束された事柄を忠実に所持（*possessio*）することであるが、他方で所持するということとは相容れない。だから我々が約束された事柄を所持するならば、それはその事柄をもはや信じておらず、ただ享受している（*fruemur*）ということになる。というのも、我々にとって信仰とは所持への導き手（*dux*）であり、これに達したとき終わりを迎えるものだからである。前の「ヘブル人への手紙」の一節を彼の者たちの言うように解釈すれば、それ自体全く不明瞭でないはずの事柄を不明瞭なものとしてしまい、それ以降のくだりや事柄を十分に理解することができなくなる。彼らがこのことを知っておいてくれると良いのだが。そういうわけで、この聖句の一節は入念に検討されねばならない。まず、ここでの「実質」という語は、文字通り事物の実体を表しているのではない。もし信仰に実体があれば、すなわち望ましい（*sperantur*）事象としての実体があれば、その事象の実体は事象に先立つ。そして望ましい事象は依然として存在していない。したがって、死者の復活を我々は待ち望むのであるが、それは未だなされていない。仮に我々の信仰

に実体を持つようになれば、それは「現実の実体」²を持つことになる。つまり復活は、それが成就する以前に、少なくとも実質的には存在することになるのである。しかしそれはあり得ない。さらにいえば、もし死者の復活や審判の日、キリストの受難等々を信じているなら、その信仰があなたの方の中にあるのだから、その全てがあなたの方の中にあることになるが、これは筋の通らぬ話である。逆にそうした事柄を信じていないのなら、我々に無関係であるということではない。というのも、そうした事柄は実体なくして、換言すれば信仰なくして存在し得ないが、これもまた筋が通らないからである。「実質」という語も、実証³あるいは「証明」も、知識を意味しているのではない。なぜなら知識は知っている人の内にあるのに対し、事象の実質と実証はその外にあるからである。これが、言葉から訳した者たちが行ったように、パウロ書簡が理解されなければならない理由である。「信仰とは、望んでいる事柄の実質であって、見えないものを確証するもの」である。つまり信仰は、まるで我々に見えないものを目の前に置くかのようなのである。（存在しないものは目に見えないのだから）信仰によって我々にそれが見えるようになるということではないが、我々には見えているように見え、あたかも見ているようにそれを認めるようになる。だからパウロはガラテヤ人に向けて、彼らの中でキリストが磔刑に処されたのだ（「ガラテヤ人への手紙」、III, 1）と言った。パウロ自身が目の当たりにしたかのように思えるほど鮮烈な言葉で教えが説かれ、言い表されている。モーセの言葉について述べられるのも、この書簡の同じ章である。そこには「信仰によって、彼は王の憤りをも恐れず、エジプトを立ち去った」（「ヘブル人への手紙」、XI, 27）とある。

我々に反対する者たちは、信仰が神の言葉を聞くことから生まれると言う。信仰が知識であるように、神の言葉は我々の足下を照らす明かりであると彼らは言う（「詩篇」、CXIX, 105）。これについての私の答えは、神の言葉が明かりに喩えられるこの一節は、詩編の至る所からそうなるのだが、特に「私の足下」という語から、掟に関係するというものである。彼らは進むべき道、つまり私に定められた事柄を行うための光が問題となっていると強調する。したがってこの句では、確実に明瞭な掟に対する知識が論じられていることになる。だからといって、我々の信じていることが遍く知られていることにはならない。見知らぬ地へ行くことがアブラハムには定められていた（「ヘブル人への手紙」、XI, 8）。この掟は、「故郷を去れ」という明確なものである。とはいえアブラハムは自分がどこへ行くか知らず、信ずるに値する導き手（*ducem*）を信じ、その者がどこへ導く（*ducat*）のか知らぬまま従う際に我々が行うようなことをしたのであった。同じように、荒れ野で闇夜を照らす火柱を前にして、この火柱がどこへ導き、どこで止まるのかを知らぬまま、イスラエルの人々はこれに従い、大変な回り道をしたのである。彼らは火柱が自らの導き手であることを理解していたが、まさにそれこそが知識なのであった。しかし彼らは進むべき道を知っていたのではない。見知らぬ場所を通して彼らを導いたのは信仰の力であった。我々が誰に従うのかを知ることは最も重要である。でなければ、サタンの使いに従ってしまう恐れがある。しかし我々の導き手がどこを示すかを知ることに関していえば、それは必ずしも我々の問題ではない。神ご自身がそうすることを許さないこともある。神の威光は実に偉大であるが、もしも見知らぬ地を通り従うほど神を信頼していれば、我々の信仰と従順さ（*obedientia*）も非常に偉大である。

² *substet*.

³ *subjectio, demonstratio*.

同様に、ある人を非常に信頼していれば、どこへ導かれるのか知らなくとも、我々は決まってその人の言葉をただ信じ、どこへでもついていくものである。

第6章

我々への反論として、「知る (sciendi)」という語が「信じる (credendo)」という語と同じように用いられていると思しき聖句がある、ということが言われる。「ヨハネの第一の手紙」の一節がこれに当たる。「わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている (scimus)」（「ヨハネの第一の手紙」、III, 2）というものである。また「ヨハネによる福音書」におけるマルタの言葉も引き合いに出される。「しかし、あなたがどんなことをお願いになっても、神はかなえて下さることを、わたしは今でも存じています (scio)」（「ヨハネによる福音書」、XI, 22）とある。またマルタは、自身の兄弟が「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています (scio)」（「ヨハネによる福音書」、XI, 24）と言った。さらに「ヨブ記」には、「わたしは知る (scio)、わたしをあがなう者は生きておられる、後の日に彼は必ず地の上に立たれる」（「ヨブ記」、XIX, 25）という一節がある。「テサロニケ人への第一の手紙」には、「あなたがた自身がよく知っている (sciatis) とおり、主の日は盗人が夜くるように来る」（「テサロニケ人への第一の手紙」、V, 2）というパウロの言葉もある。これらについて、そして必要があれば他の似たような聖句について、「知る」という語は「確たる方法によって信じる (certo credere)」ために用いられていると私は答える。かつそれは、善き信仰を持つ人間が何か示す際に、我々が普段用いる伝え方である。例を出せば、「私は彼が来ることを知っている。彼が私にそう約束したから。私は役人が毎月報酬を支払うことを知っている。彼が私にそう約束したから」といったものである。しかし我々がそう言うからといって、それが本当に知識であるということにはならない。知識と同じく、確たる信仰とは、我々に対してはたらきかけ (movemur) をしないものである。これが——厳密ではないが——ここで我々が知ることにについて語る理由である。何らかの方法で、信仰は知識に変わると言うことは付言しておこう。また古代に、エニシウスの死が発表された際、それは疑わしいものであったのだが、信じた者はその語本来の意味を信じたのであった。風説でしか知らないのに、もはや疑われることがない中で今それを信じている我々は、何らかの方法で信仰よりも知識を駆使している。だから迷いなく、そのことを知っている和我々は断言するのである。同じように、自分は神によって遣わされたのだとモーセがイスラエルの人々に語り始めた際（「出エジプト記」、IV, 28）、彼を信じた者たちはその語本来の意味を信じていた。しかし彼の布教活動が、エジプト人もカナン人も疑い得ないほど多くの奇跡と事績によって認められた際、これを信じることは、信じるというより知ることだったのである。キリストが生きておられた頃のユダヤ人は知るという事柄について明言している。「（わたしたちは）モーセに神が語られたということは知っている」（「ヨハネによる福音書」、IX, 29）と。知識の段階にあるような信仰は徳 (virtus) ではない。信仰が存在するのは、存在せざるを得ない場合のみである。信じざるを得ないものを信じることは徳ではない。それは洩々人間によって認められるが、持っていても無益な知識である。

しかし信仰が神の賜物であり、人間の自由意志より生じるのではないと思わせる文章⁴が引き合いに出されることもある。神の恩寵を通じて与えられるものを、人間は自らの意志によって得ることができないからである。こうした見解の根拠として引用される聖句をここで繰り返す必要はない。パウロは「エペソ人への手紙」においてこう述べている。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である」(「エペソ人への手紙」, II, 8ff) と。ここでパウロが神の賜物として考えていたのは信仰ではなく、救われるという事実、すなわち彼自身の救済である。表面的に読み取る——ありふれた見解をよく考えずに受け容れる際にしてしまうような——ことをせず、少し考えてみれば、そこには三つの理由があることがわかる。1) ここでは信仰ではなく救済が問題となっている。「ダニエルが無傷でライオンから逃れられたのは信仰を通じた神の恵みによるであり、彼自身によるのではない」(「ダニエル書」, VI) と言うことができよう。ここで彼が難を逃れたのは神の賜物であった。2) 「あなたがた自身(の行い)から出たものではなく」という言葉は信仰ではなく救済に関するものであり、これは行いによって得られるものではない。故に誰が、信仰が行いからは生まれないことを知らぬというのか。3) ここでいう神の恩寵と賜物とは、同一のものである。恩寵とは明らかに救済に関わるものなのであるから、議論の余地なく、神の賜物と同じであると言わねばならない。付け加えておくと、この一節の直前でパウロは、信仰の話はせずにこう語っている。「あなたがたの救われたのは、恵みによるのである」(「エペソ人への手紙」, II, 5) と。ここから、信仰という言葉がついでに付け加えられたことがわかる。パウロの考えは、(彼にはよくあるように) 二つの対になる見解を含んでいることを考慮すると、より明確になる。それは以下の形となる。

あなた方は恩寵により、信仰を通じて救われる——それはあなた方自身から生まれるものではない。

あなた方が救われるとすれば、それは神の賜物による——それは行いによるのではない。

ここで「使徒行伝」の一節を引き合いに出すことがより正しいとは、私は思わない。この一節には「主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに耳を傾けさせた」(「使徒行伝」, XVI, 14) とあるが、この文で問題となっているのは信仰ではなく、信仰によって持続する注意深さ(attentione)だからである。そのかわり、「コリント人への第一の手紙」にパウロの記述がある。そこで彼は信仰を聖霊の賜物と呼び、「すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている」(「コリント人への第一の手紙」, XII, 8-10) としている。この文章や、もし見つければ同じ類の文章に対する私の答えは、全ては神の賜物だということである。しかし神は二つの方法で与えるのである。一つは自然的(naturalem)に、もう一つは奇跡的(miraculosum)にである。神は自然的な方法で、地を耕す人間にパンを、漁師に魚を、鳥刺しに野鳥を与える。しかし奇跡によって、地を耕していなかった荒れ野のイスラエルの民に、マナたるパンを与えたのである。神が使い(「列王

⁴ アウグスティヌス、エラスムス、ルター、ツヴィングリ等。

記上」, XIX, 5ff) や烏（「列王記上」, XVII, 6）⁵を遣わしてパンをエリヤに与えたのも奇跡を通じてのことである。これらについて、パウロに従えば、我々が前に挙げた聖霊の賜物と同様に考えなくてはならない。幾人かに奇跡を通じて賜物をもたらしたことは明らかである。しかし全く同じ賜物が奇跡によらず受け容れられることもある。奇跡が起こらずとも、知識（scientia）と知恵（sapientia）を与えられた者がいるからである。それは奇跡を呼ばずとも病を癒す医者や、未来を予言する占星術師に見られる。彼らの多くは奇跡ではなく、長きにわたる勉強（studio）によって専門的な知識を有するに至ったのである。だから私は同じことが信仰にも言え、時には奇跡によって、またある時には奇跡がなくとも人間は信仰を持つことができると思う。十分注意して、これらを区別してもらいたい。この区別は多くの聖句を理解するために重要であり、この区別によって、誰かが言ったかもしれないことを、すぐに他の全てに当てはめる者たちが犯す誤謬に対応することができる。そういった者たちの論拠は、次のように理屈立ててみても筋が通っていない。聖霊を通じてある者に癒しの賜物が与えられるとパウロは言う。だから病を癒す者は皆、聖霊から力を得た。そして同じことは他の賜物にも言える。言語を解する者は皆、その力を聖霊から得たのだ。ここでもう一度付言しておきたいのは、彼の者たちが望むように、仮に信仰が常に神の賜物であったなら…（カステリヨンの文章はここで終わる）

【付録】

*De l'art de douter*の構成は以下の通りである。

LIVRE PREMIER

Introduction : l'Esprit et la méthode

- I Le monde est gouverné par la providence et non par le hasard
- II Divers exemples de l'intervention divine
- III La sanction divine, si elle ne s'applique pas toujours sur terre, s'appliquera assurément dans la vie future
- IV Nature et culture
- V Nous ne devons pas admettre une doctrine sans réflexion
- VI La doctrine la meilleure est celle qui rend les hommes meilleurs
- VII Les quatre raisons qui prouvent l'excellence de la religion chrétienne
 - 1) la concordance et la constance
 - 2) l'assentiment immédiat
 - 3) la confiance
 - 4) l'épreuve de l'expérimentation
- VIII 1er point : la doctrine chrétienne s'est maintenue depuis les origines soutenue par une aide

⁵ ウルガータでは第3巻。

- plus qu'humaine et certainement divine
- IX 2è point : seule la doctrine chrétienne touche l'homme tout entier
3è point : les prédictions contenues dans les Saintes Ecritures se sont réalisées
- X 4è point : le grand miracle de l'Evangile : il est une puissance de transformation du monde et de changement des âmes
- XI Trois difficultés à propos de la Bible qui contient des obscurités, est en désaccord avec elle-même et suscite des interprétations opposées
- XII Eclairer le texte par contexte
- XIII Les mots sont au service des auteurs sacrés et non le contraire
- XIV Savoir faire la différence entre les quatre sortes de textes qui sont dans la Bible : la révélation et la prophétie tenues pour Parole de Dieu, la connaissance suscitée par les témoignages, la doctrine qui est une opinion humaine
- XV Distinguer dans les Saintes Ecritures ce qui vient du Seigneur des opinions personnelles
- XVI Ne pas mettre les témoignages et les opinions des hommes sur le même pied que la Parole de Dieu
- XVII Une mauvaise doctrine n'élimine pas les mauvaises mœurs
- XVIII De l'utilité de savoir douter des choses incertaines ou obscures
- XIX Croire et savoir
- XX La controverse théologique s'arrête devant les préceptes de la charité
- XXI Il ne suffit pas d'éclairer un texte par les autres textes sacrés
- XXII Dieu a voulu que les Saintes Ecritures soient parfois obscures (et non absurdes) pour permettre à l'homme d'exercer son habileté
- XXIII Il faut à la fois s'appuyer sur les textes des Saintes Ecritures et se servir de notre jugement critique
- XXIV Une méprise à éviter : nous refusons d'admettre ce qui contredit le témoignage des sens et non ce qui les dépasse
- XXV La raison, ou logos, a le pas sur les Saintes Ecritures qu'elle peut seule interpréter
- XXVI Les écrits sacrés et les récits profanes disent parfois la même chose (lorsque ces derniers suivent le jugement de la droite raison)
- XXVII Rejet du péché original : ni les sens ni l'intelligence de l'homme n'ont été corrompus par le péché d'Adam
- XXVIII Le jugement de la raison peut être entravé par la déficience de la volonté
- XXIX L'homme peut rectifier les erreurs de ses sens en utilisant sa raison
- XXX La raison comme les Saintes Ecritures nous disent parfois des choses tout à fait contraires
- XXXI Ne pas confondre l'impossible et le miraculeux
- XXXII Les affections de la chair aveuglent le jugement de l'homme

LIVRE DEUXIÈME

- I Méthode employée

- II De la Trinité
- III De la foi. Qu'elle procède de la volonté, non de l'intellect
- IV Réfutation des arguments de ceux qui prétendent que la foi procède de l'intellect
- V Réfutation des passages communément invoqués par ceux qui veulent que la foi soit une connaissance
- VI Ne pas confondre la foi qui procède du libre-arbitre de l'homme et le salut qui est l'œuvre de Dieu

DE LA JUSTIFICATION

- VII Le Christ guérit réellement, et non par imputation, les âmes des croyants de l'injustice comme le médecin guérit les corps des maladies
- VIII Il ne suffit pas d'être tenu pour juste si on ne l'est pas véritablement
- IX L'homme est justifié par la foi, non en pensée ou en imagination mais véritablement
- X La foi est du ressort de l'homme, le pardon des péchés en revanche appartient à Dieu
- XI Justification selon la loi et justification selon la foi
- XII Le Christ monté au ciel envoie à ses disciples l'esprit de justice qui les régénère et les sauve
- XIII Toute justice imputée est imaginaire
- XIV Le péché n'est pas détruit par la mort. Il peut disparaître pendant la vie présente
- XV Il y a des hommes qui obéissent à tous les commandements et qui sont justifiés par la vraie justice divine et non par une justice qui leur serait imputée
- XVI L'imperfection n'est pas un vice
- XVII Le juste est celui qui possède l'esprit de justice en dépit de ses fautes
- XVIII Il faut se méfier des fausses citations
- XIX La justice des hommes peut être réelle, mais elle n'est pas parfaite
- XX Dieu seul décide de notre justification
- XXI Dieu pardonne nos fautes dont il nous purifie en nous justifiant
- XXII Demande pardon à Dieu si tu as péché
- XXIII Qu'est-ce qu'une bonne traduction ?
- XXIV L'homme est vainqueur de la tentation grâce à l'aide de Dieu
- XXV Le salut est un don de Dieu qui nécessite la collaboration de l'homme
- XXVI Ceux qui auront prématurément quitté cette vie avec une foi encore imparfaite seront sauvés
- XXVII Analogie entre la greffe et la justification
- XXVIII L'homme justifié, malgré sa nature humaine, est appelé spirituel et non éternel à cause de l'Esprit qui le fait fructifier en même temps que vivre
- XXIX Si la volonté humaine résiste à la chair, il ne fait pas de doute que l'Esprit finira par triompher
- XXX De la grâce du Christ accordée aux croyants
- XXXI C'est l'homme qui a besoin de se réconcilier avec Dieu et non le contraire puisque Dieu ne s'irrite jamais

- XXXII Dieu pardonne à l'homme tantôt au nom du Christ, tantôt parce que l'homme a réformé sa vie
- XXXIII Dieu peut être irrité contre les hommes et continuer à les aimer
- XXXIV Il est contradictoire de dire que la colère de Dieu envers les hommes est apaisée par le sacrifice du Christ et d'exiger d'eux la réforme dans leur vie pour apaiser sa colère
- XXXV Le pardon obtenu par le Christ est conditionné par la conversion de l'homme
- XXXVI Le Christ, seul innocent dans la cité qu'est le monde, obtient du roi qu'est Dieu le pardon des hommes sous réserve qu'ils se corrigent
- XXXVII Dieu est l'auteur de l'Esprit, le Fils en est l'arbitre et le dispensateur

DE LA SAINTE CÈNE

- XXXVIII La désobéissance procure la mort, l'obéissance procure la vie
- XXXIX Manger la chair et boire le sang de Christ est à prendre au sens figuré
- XL Le Christ s'exprime souvent par similitude
- XLI Ne pas prendre à contre-sens les paroles du Christ
- XLII 1) La cérémonie de la Cène est une commémoration
2) Savoir distinguer l'image de la réalité
- XLIII 1) Les interprétations humaines doivent être examinées à la lumière de la raison et des Saintes Ecritures
2) Aucune transmutation n'a suivi les paroles de la Cène car Jésus s'est exprimé par métonymie
- XLIV Si le corps du Christ est au ciel, on ne peut le manger sur la terre : interpréter les paroles du Christ en esprit et en vérité permet d'éviter bien des absurdités

〔付記〕

本研究はJSPS科研費（課題番号：21J10778）の助成を受けたものである。

Sebastian Castellio, *De l'art de douter et de croire, d'ignorer et de savoir*
(Book II ; Chapter I-VI)

Sena KOYAMA

Key Words

Sebastian Castellio (1515-1563), Trinity, Faith

Abstract

Presented here is a Japanese translation of Sebastian Castellio's last work, *De l'art de douter et de croire, d'ignorer et de savoir* (reedition in 1996).

Castellio was a Christian theologian in the 16th century living in Basel, Switzerland. When young, he lived in Lyon, France, where he learned about ancient Greek, Latin, and Christianity. This city was prosperous in printing and commerce and famous well as a base for Humanists, for example, François Rabelais. After suddenly converting to Protestantism in his adolescence, he moved to Geneva to meet John Calvin, the founder of Calvinism. At first, the two Protestants got along, but they had a falling-out soon later because of disaccord in interpreting the Bible. Since that, Castellio left for Basel and engaged in controversy with Genevan theologians like Calvin and his successor, Theodore Beza, until his death. It was on this condition that Castellio wrote his last work as a compilation of him. Although it was unpublished during his lifetime, some parts were circulated by philosophers or thinkers in Western Europe and influenced modern thoughts.

Despite this interesting fact, there has been no available translation of *De l'art de douter* in Japanese ever. So the translator has picked up some chapters and attempted the first Japanese version of Castellio's most fundamental and significant work. This time, the themes are about Trinity and Faith.